



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

---

CITATION:

花山だより. 天界 1936, 17(189): 114-114

ISSUE DATE:

1936-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167390>

RIGHT:

## 花 山 だ よ り

霜降り月は行樂のシーズン。野に山にサツソウたる<sup>いでたら</sup>ハイカ<sup>イ</sup>が充滿する時、花山の空は紺碧に晴れて、路傍の草木等しく色づく。ゾロリゾロリと花山道路に杖を引く人々も今が醋。先づ2日には遠輕の校長鈴木氏を始めとし、3日は満鐵總裁松岡氏、13日には中頓別村長佐藤氏、28日には田中宗愛博士と云ふ様に、平均1週間目には必ず誰方かの訪臺があつた。勿論、50名、100名と隊伍を整へた參觀者は云はずもがな、24日には京都市内某女學校の生徒計900名が大舉して一時に押し寄せ、廣くもない天文臺の構内が、英帝御退位當日の議事堂廣場の如く、頗る聲あり、喧ましく、時ならぬ非常時を現出した。無論、天文臺のイカメシい門の前迄來て、掲示板を恨めしげに見入りながら引き返へす人々を加へたら、11月中旬に花山道路を往復した瓢人は蓋し幾何に上つた事だらう。やがて霜が降りて、雪が降り、身を刺す一陣の風に、秋の名残りの古新聞紙と、グリコの箱と、キャラメル<sup>の</sup>箱と、ゴールデンバツトの藻拔けの殻がヒラヒラと舞上る。そしてそれが風化作用によつて何處ともなく消え去り、新しき土に還元する迄には、少くとも地球は數十回自轉して居るだらう。

清水山と花山山との谷間にあたり、毎日ゴドンゴドンと仕事をして居る家がある。其れは天文臺の給水小屋であり、其の中には吸上げポンプが一つだけある。所が11月の初めに、忽然としてストライキが初つた。それは齒車の故障のためであつて、其の修理に可なりの長日を要した。元來、此のストライキはチョイチョイ起る事件であつて冬期氷結期間には特に甚だしい。我々の酷使に對する無言の反撃として一應受理すべき意味合ひのものであるが、早晚何とか待遇を改善してやらねばなるまい。

過ぎにし夏の日<sup>の</sup>臭靈の祟りにや、本月下旬、突如としてドームが開かなくなつた。目下、天變頻來の折、此れを向へる者、皆等しく脾肉を嘆じ、天を仰いで再拜した。けれども、ドームの故障は本月中には直らなかつた。

本月は月斗生氏不慮の病ひにて目下靜養中、例の名文に接し得ない事を讀者と共に嘆く。〔花山だより〕も亦泣いて居る。(花山子)